

- 1 本書は『日本近世生活絵引』の2巻、北海道編である。
- 2 本書は、秋田県立博物館菅江真澄資料センター所蔵の菅江真澄『蝦夷喧辞辯』『蝦夷廻天布利』模写本の挿絵から11のテーマを、また大館市立中央図書館所蔵の菅江真澄『百白之図』から1のテーマを立て、国立公文書館所蔵の央斎『模地数里』の挿絵からは11のテーマを立てた。また、函館市中央図書館所蔵の『江差檜山屏風』は6折1双4尺の屏風絵（乾・坤）からなり、乾は「上ノ国材木流之図」、坤は「江指浜鯨之図」からなるが、その屏風絵の前者から6の描写を、後者から11のテーマを選択した。そのうえで、文字説明その他不要と思われる部分を除き、図像として描かれた事物・行為に番号を付け、それらを表現する語をキャプションとして与え、また図全体を読み取り、解説した。
- 3 菅江真澄の作品については、おおむね景観・生活・生業・遊びの順序で図絵を配列した。『模地数里』も描写の順番にこだわらずに、内容的に近いものを並べた。また、『江差檜山屏風』については管流し材木とその筏組み、そして鯨漁業の操業手続き、生産、加工、出荷の順序が理解できるように屏風絵を切り取り、配列した。
- 4 一つの図とそれに対するキャプション・読み取り解説を原則として見開き2ページ（一部は3ページ）に収録した。従って、対象の図の大きさによって、拡大もしくは縮小しており、原本の大きさとは一致しない。なお、図は必ずしも原本の描いた範囲ではなく、必要に応じてトリミングをし、また詞書きなどは消去してある。
- 5 各図に付ける番号は、以下の原則のいずれかによった。
 - a その図像に与えたテーマに即して、テーマに近い事物から周辺的な事物へと付ける。
 - b 遠近法に従い、図像の中の近いところから遠いところへと付ける。
 - c 描かれた図像内容の時間の展開にそって付ける。
 - d 右上から左下へS字形に付ける。
 - e 菅江真澄の図絵の場合には、真澄の付した番号の順番に従った。
- 6 キャプション番号に対する語の記載に際しては、まとまった全体についての語の場合は○を番号に付けた。それぞれの項目解説では原則として○番以外のキャプション番号を括弧書きで表記した。
- 7 各事物・行為に付ける語は、以下の基準によった。
 - a 原則として事物単体にキャプションを付ける。
 - b 名称は図像が描かれた江戸時代の表現・表記を優先させ、カッコ書きで補記した。
 - c 所作・行為のキャプションは現代語で付けた。
 - d 推測・推定・想像によるキャプションはできるだけ避けるように心がけ、推測・推定・解釈に及ぶことは読み取り解説で記述した。しかし、厳密ではない。
- 8 本書の編纂は共同研究の方式で行われ、研究参加者で検討したが、各図の読み取り解説については原稿作成の者が個人の責任で書いた。Ⅰ・Ⅱは菊池勇夫が、Ⅲは田島佳也が執筆分担した。
- 9 巻末にはキャプションとして付けた語句についての五十音順索引を付した。
- 10 『江差檜山屏（乾）上ノ国材木流之図、（坤）江指浜鯨之図』の『絵引』化については、次の方々のご協力とご教示をえた。記して感謝申し上げる。

池田貴夫 児島恭子 土田拓 故 林健太郎 引門隆文
 舟山真治 宮原浩 宮本八重子 森山英夫 脇野博